

# エイジンのサッカーノート

## もくじ

原石を求めて

サッカーで遊ぶチーム

クラブ運営について

はじめのいっぽ

発育発達に応じた指導

私のサッカーの師匠

ボールリフティングの不思議

ボールでおにごっこ

いじめなんてこわくない

飛行少年

保健体育審議会

三振まえのバカあたり

太陽の子供たち

## 原石を求めて

わたし自身は少年の頃のサッカー経験はない。少年のイメージネーションを持たないし、自然に覚えたテクニクも持ち合わせていない。ボールを蹴っている少年たちを羨ましいとさえ思う。しかし、私も少年の頃、違うスポーツで楽しさを味わった。この時期の自由で奔放なところは今も同じだ。私がサッカーを最も愛した理由は経験したことのない少年サッカーを想像して、今も出来ることかもしれない。

私はサッカーを通して多くのことを学びました。言葉では表せないほど心を広げてくれました。生きる喜びさえも、たった一つのボールが与えてくれたように思います。

私はこの想いを若い指導者に伝えたくてここに書きしるすことにしました。おそらく今、夢中になってボールを追いかけている人には、喜びの真っ最中で私の言葉など耳に入らないでしょう。

「私もね、若い頃はね」

「おじさん、ちよっとだまってよ」

よしよし、君たちが指導者になる時まで待つことにしよう。ここに書いておくよ。

―子供の指導者になるためには自分が指導者であることを忘れて―  
サッカーの楽しさ、おもしろさを知ってください。

そして、それを教えてください。

子供にかえって子供と一緒にやってください。

おとなのお仕着せのサッカーから子供を守ってやってください。

子供をむりやり上手にさせないでください。

子供が上手になるまで見守ってやってください。

勝つためのサッカーをやらせないでください。

失敗をしからないでください。

一人一人に励ましの声をかけてやってください。

もし指導に行き詰まったら何時間でも子供とボールリフティングをやってください。ボールが教えてくれます。

こういう指導者になったら、子供たちはサッカーもあなたのことも一生忘れないでしょう。

## サッカーで遊ぶチーム

私の住む地域（学校区）はまったくサッカーが行われていませんでした。普及に関してはいくつかの方法を考えましたが、人材の放出が宿命的な地方の性格上、少年の育成がどうしても必要と結論しました。

将来どこでおこなってもサッカーを楽しむことの出来る選手、自分のやったサッカーに自信のもてる人間になればいいと私は望んでいます。もっと欲を言えば俺たちのサッカーが一番と胸を張れる生き方を出来る人間になってくれればと願うのです。

育成の主眼は子供たちがサッカーとはどういうものかをまず知ることからはじめ、私の立場からはいかにサッカーの本質を知らせるかを課題にしました。

スポーツの基本的原理は「遊び」であり、「自由」である。この原則をもとに少年チームの指導にあたりました。構成年齢は小学生1年から6年までを対象にボール蹴りをはじめました。

練習はミニサッカー（フットサル）が主食で、オカズはボールリフティングに若干の個人技術で味付けをするメニューです。

ここで指導者が教えることはなにもありません。真の役割はミニサッカーに混ざり、誰よりも楽しむことです。ボールリフティングはどちらが回数を多くやるか競争です。基本技術は「これをやりなさい」という師弟の関係ではなく、「これはできるか」といって披露する子供の目線の関係が重要です。

この年代の指導には理論は不要です。また、過去の経験も必要ありません。重要なのは指導者がしっかり研究してサッカーのイメージをいかに豊富に持ち得るかです。こういう観点から指導書を読むと非常に参考になります。指導書どおりに教えようとすると型どおりになり興味をなくする原因です。子供と一緒に技術を追う姿勢があつてこそ練習にも面白みが出てくることになるのです。

このクラブに参加する子供は、そのほとんどがはじめてサッカーを体験します。当然少年でも青年でも初めてボールを操るのですからプレーは上手く行かない。ここから試合に出て活躍するまでは相当の練習期間あるいは、その競技に慣れる期間が必要です。徐々に上達して試合に起用されるのですが、この過程は子供も大人も集中して練習すればおそらく同じくらいの時間で技術習得が可能と考えられます。

ところが青年期を越えるころからは新しい技術を習得するのに時間がかかる。あるいは習得できない状況がしばしば見られます。

これは、ヒトの発育発達に関連していると私は考え、幼児が言葉を自ら学習するように、箸を自由に使えるようにボールも扱う方法を考えました。

この試みは「自然の発達」を実践するものでした。そして、そのヒントになったのは文化人類学者カイヨワさんの「遊びと人間」でした。

その著書の中で彼は遊びを6つに定義しています。

<カイヨワ(Caillois,R.) 1958>

- 1, 自由な遊び・他人から強制されればたちまち魅力的で楽しい気晴らしという性格を失ってしまふ、自発的な活動。
- 2, 分離した活動・あらかじめ決められた厳密な時間と空間の範囲内に限定された活動。そして、遊びは本質的に生活の他の空間から分離され隔離された活動。
- 3, 不確定な活動・あらかじめ活動の展開の仕方や結果が分かっていない活動。
- 4, 非生産的な活動・財産も富も、いかなる種類の新しい要素も作り出さない活動。
- 5, ルールのある活動・通常の法律を停止し、そのかわりに、それだけが通用する新しい法律を一時的にたてる約束に従う活動。
- 6, 虚構的な活動・現実生活と対立する第2の現実、あるいは、全くの非現実という特有の意識を伴う活動。

スポーツがこの範疇に入ることも著わしています。ならば、当然サッカー (Football) も遊びと考えて差し支えありません。

実は私が学生時代から興味を持っていたのがこの遊びでした。そしてサッカーのスタイルが国や民族によってそれぞれ特徴があるのは、ボールへの接し方が国や民族によってそれぞれ異なっているせいではないかと考えるようになりました。私の知る限りではイングランドの体力に物言わすキックアンドラッシュ。ラテン系の華やかな個人技、中央ヨーロッパの整然とした試合はこび、南米の巧みなボール扱いと違いがあることを感じていました。これはその国の人々や民族単位でボールに接した楽しさや意識を代々伝えてきた結果ではないかと私は結論付けました。カイヨワさんが分析した遊びの定義は純粹な社会文化を―社会の状態から隔絶させて―次世代が受け継ぐ役割を果たしているのではないかと私は解釈しました。

―勝利と遊びの狭間で―

私が学生生活を終えて教員に採用になったとき、正に勇躍して「スポーツは遊び」を実践しました。私の推論の実験室となったのです。

まず、中学サッカー部の顧問に就任したときに行なった指導は先輩を含めて新入生ともどもボールリフティングと基礎技術と小人数によるゲームでした。当然先輩たちには不評で、「こんなことをしていたら試合に勝てない」という直訴までありました。「フオーメーションの練習をやらせてください。」「戦術をもっと教えてください。」という要求もすべて断り、「まず私に勝つてからにしないでください。」という具合にやっつけていきました。私のボールリフティングの最高回数は学生時代に一度だけ千回を達成。「それを抜け。私のフェイントを突破れ。私に絶好のパスを出せ。」とばかりに一言葉では生徒に強要していなかったが―私も子供たちに混じってもう一度1000回に挑戦して、グラウンド狭しと走りまわっていました。

ボール遊びの見本と言ふべきか、私にはなかつたサッカーの遊びの時期を生徒と一緒に経験し、自分の空白だった技術を獲得するために初心者として生徒に混じりました(一番上達したのは私だったのかもしれませんが?)。

この時期の成功は2年もするとボールリフティング千回を超える者が何人も出現（私は終生一度きりだった）していたし、日本人では私が嘗て出会った事もないような巧みな技術を發揮する選手が出ていたことです。

わたしの1970年代半ばから80年代のはじめにかけては文字通りサッカーの宝庫でした。ペレを目の当たりにし、トヨタカップでヴィクトリーのドリブルを見るのが出来、東京朝鮮高校の桁外れな強さを知り、ブラジルのユースの個人技を見て、最後に単身ブラジルにサッカーの勉強に行くことができたことです。

もしその当時、空き地でボールを蹴っている子供をたびたび見かけていれば、私はそれを観察して（いやそれに混じっていたらどう）遊びの効果をもっと早く発見出来たかもしれないし、その子供たちを中学に誘って大いなる夢を見ていたかも知れません。しかし残念ながら、もうすでに放課後の自由時間は子供にはなく、塾とそこら台頭してきたスポーツ少年団に集約されていきました。

その少年団も中学や高校と同じように勝つことを義務付けた練習に終始するようになっていました。私は勝負師のようになつた高校や中学の監督を辞め、とにかくサッカーの楽しさを伝えなければならぬ義務感で少年のサッカーへ転身しました。

もう一度確認のために言えば、サッカーは遊びです。自由であり、たとえ指導者と名を語ろうともサッカーを強制すればその魅力が一瞬のうちに消え去ってしまうのです。

## クラブ運営について

私たちはクラブのあり方についてもっと研究しなければならない。

クラブはもともと社交を目的として余暇を楽しむ人々が集まって出来た。そこに参加するには簡単なルールは存在するが、参加する人の意思を束縛したり生き方を左右する性格は本来持っていない。会員になれば全ての人が楽しむことが出来るのがクラブのあるべき姿ではないだろうか。

このことはカイヨワ先生が言う―あらかじめ決められた厳密な時間と空間の範囲内に限定された活動。そして、遊びは本質的に生活の他の空間から分離され隔離された活動―遊びの空間を共有してはじめて成り立つ。

こういう原則をふまえて考えれば、自然にクラブ組織の在りようが見えてくる。

スポーツ競技にしてもリクレエーション種目にしても第一の目的はその種目をいかに楽しむかという根本に帰する。こういう集まりが出来れば、老若男女や優劣の区別なく同じ余暇の空間を共有できることになる。

現代スポーツの弱点は、特に競技スポーツに限れば競技会ありきで、―協会や連盟の主導者にしてみれば競技会開催が最も簡単な競技人口拡大策なわけです―競技会に参加するために仲間を募りチームを結成する。これは競技成績を目的にした小集団を生むことになり、サッカーのように流行に乗れば競技人口を爆発的に増やす引き金になるのですが、こういう現象はやかんのお湯が沸騰してぶくぶく沸いてくる泡に似て、中の水がなくなったり、火が消えるとそこで終わってしまう。

もう少し言及すればスポーツ界は勝利が至上のアマチュア組織からプロという富と名誉を目的にした組織を作ることと選手の枯渇を食い止め、さらにスポーツのエリート化で優秀なプレーヤーの安定供給を確保するシステムを作り上げた。少なくとも日本のスポーツ組織の意識はそう見える。

こういう流れは世界のすう勢でいたし方ないが、みんなのスポーツ、生涯スポーツの理念からはどんどん遠ざかって行く。これを食い止めるには私たち一般の愛好家が、ただ競技に参加するために集まるのではなく、愛好家自身で楽しむ場（ホームグラウンド）をつくらなければならない。

私がここに書き残す文章の底流にはサッカーの本質とそれを実行する場所をつくるための思索が込められています。他に押し付ける意図はありませんが、私たち一般市民がこの概念を認識して行動することによって日本の普遍的スポーツ文化が後世に伝わっていくと確信しています。

## はじめのいっぽ

私の当初の計画は普及、育成、クラブの組織化を順次進めていく方針でした。具体的には少年のチームを結成して、この地に種を蒔く仕事から始めなければなりません。次に愛好者が誰でも参加できるクラブ（先にも書きましたが老若男女優劣の区別なく参加できる）の組織化。最後にその中の優秀な選手のチームづくり。このプロセスが私の計画でした。

はじめの一步は私の住む町名をとり「山名フットボールクラブ」の銘々となりました。

―開墾と収穫の日々―

資本のない一介のサッカー好きにとっては体を泣かせる以外に方法はありませんでした。

しかし、第一歩が幸運にも踏み出した事が現在に繋がっています。「サッカーは遊び」というテーマは親にも好評ですぐに受け入れられました。というのも少年野球全盛の時代、勝利追及の強引な指導にかなりの人が疑問を抱いて、また、漫画「キャプテン翼」の雰囲気や格好良さがサッカーへの憧れとなったこともあって、サッカーに多くの人が目をむけてくれました。種は蒔かれました。

自由ののびのびとグラウンドを走り回る姿は今も全く変わっていない。

私の育成プランは子供たちがこの地を巣立っていく、少なくとも高校卒業の段階まで指導する計画でした。今でもこのプランは消えていませんが、私には高校生まで一貫指導すればかなりのレベルまで上達させる自信がありました。しかし、これは時期尚早、学校制度の枠組みは当時において頑丈で高い壁となって立ちふさがりました。

遊びの中で体得した個性的な技術は未熟ながらも全員に備わっている。

現在の学校教育の不幸は多様化した社会に対応するには狭量で固定化してしまい、そういう社会に順応しようとする子供たちが受け入れられないところに起因しています。スポーツも同じ事が言えて、その子供の創造性や発想が無視され指導者の法則に従わざるを得ない、サッカーでいえばコーチングの教科書のプレー以外は認められない状態になっていること、さらに選手にとって災いなのは最も技術が伸びる時期に勝利主義（監督のメガネにかなわない生徒は試合に出られない）の犠牲になってしまうことです。

ここまで私の話が進んでしまうと、いかに好意的な小学生の親といえども半信半疑になつてしまうものです。

太い一本の柱として、地域のスポーツクラブでの育成は時を待たなければなりませんでした。今でこそリーグが誕生して下部組織の義務付けでその形態が明らかになりましたが、このシステムに着手する人は群馬にはまったくいませんでした。

巣立った子が帰って来られるサッカーの環境をつくらう

こうして育成と組織化はファイルに保存されました。しかし、育成に関しては細々とも続けなければ少年時代につくられた個性的で創造性のあるプレーがどこまで伸びるかというテーマの実証が不可能になってしまいます。そこで、体育館で週に一度フットサルを開始しました。

ゴールデンエイジは大人の中へ放り込め

幸いなことに、新島時代の教え子が私の元へ一緒にサッカーをやらうと集まって山名クラブを結成してくれました。私も10年ぶりの現役選手に復帰してサッカーを楽しみました。まさしく渡りに舟で、練習は体育館で遊びに来る山名FC出の中高生と共に行ないました。

初代山名クラブは群馬リーグ2部に再三挑戦して果たせませんでした。遊びに来ていた中高生も18歳を過ぎ、2代目山名クラブに世代交代して群馬リーグ1部まで昇りつめました。

クラブ運営にはかなりの資金が必要です。金銭的にも時間的（少年サッカー指導のため）にも私には余裕がなく、クラブの組織化は保存されたままですが、明らかに他のクラブとは異なるブレースタイルが山名クラブには出来あがっています。

少年から大人までの総合した組織は勝利に向かうチームをつくり、また、リクレエーションのチームも生み、それが少年を育てる循環になり、私たちの地域独特のサッカーを定着させることができると思っています。



## 発育発達に応じた指導

代表になるような選手の育成については有名監督の著書が何冊もあるので十分でしょう。私が問題にしたいのは、指導者がまだこれからサッカーを覚えようとする子供たちに対していかに接するかを考えてみたい。

サッカーをはじめて経験する少年がある程度年数を経て上達したと仮定します。

上達までの年数は個人差があり、ひとまとめにして論ずることはできませんが、私の経験を総合すると10年前後の体験を経て試合中における選手の技術が十分発揮できるようになります。

これを見極めるには簡単な試合（紅白試合で十分）で確認できます。それでは何をもって上達したかという判断材料をいくつか挙げてみると、ボールコントロールは相手との競り合いの中である程度ボールを自分の思うように止めることができるか。また、一連の動作でフェイントをかけた時、相手をかわしながら味方へパスを出す意図があるか。次にその選手が試合の進め方をどの程度把握しているか、いわゆる状況判断ができるか否かを見ます。

この見方は私たちが評価しようとする選手がボールを持っていないときにどういう動きをしているか―私はカバリングとっていますが、次のゲームの展開を考えて動くことができるかどうかを見ます。早熟な子供やボール扱いの手馴れた（足なれた？）子供でも良く観察すると未発達な部分が多く残されています。

間違えやすいのはそうした選手は試合で活躍してチームの中心に祭り上げられがちですが、素質と言う面では他の未発達な多くの選手と五十歩百歩といったところなのです。子供たちの間では見えざる戦いがあり、しのぎを削っているところなのです。このころの選手に対して安易な評価をあたえることは、向上心が薄れて良い結果はうまれない。

はじめてサッカーを経験する時期の子供たちにとって私たち指導者の役割はこうしたまぢまぢの発達段階の少年たちをきわめて冷静にじっくりと観察し成長を待つことです。そして、最もこの年代を指導する者の重要な仕事は技術を十分発揮できるようになった選手に適切なアドバイスをおくることです。この時期のアドバイスが最も効果的で以後の選手生活に反映されるのですが、アドバイスの時期が早まったり選手の伸びようとする方向に即していないアドバイスは唯選手を迷わせるばかりで、結局指導の失敗に帰する事に成ります。固執、自信喪失、迷いという選手のこうした心理状態は試合に即現れてきます。練習中に見せた姿とはうって変わって、やる気や自身のない仕草をしていたり、プレーが単調になって最悪の場合はほとんど自分のポジションから動かない状態になります。

プレーの退行というのでしょうか、そういう子供は低学年やはじめてサッカーをやったようにも見えてしまいます。つまりは自分が永年構築してきたサッカーのスタイルを強権によって打ち砕かれて、もう一度はじめてから組みなおす作業をしていると考えられます。

私自身も試合の勝敗にこだわり、その時期を誤ってしまったことが何度も過去にあります。

した。チームが強くなって来たのに私自身が惑わされ、日本代表監督にでもなったつもりで私のサッカーを選手全員に強要した結果、見た目はテクニックを持っていた選手も次の年代に進んでほとんど活躍ができませんでした。逆に素晴らしい才能を見せていた選手に対して私が満足して適切なアドバイスを怠った結果、天狗状態で強豪高校に進み大きな挫折をみてしまったケースもありました。私ばかりの責任とは言い切れませんが、12歳という年齢での選手に良い点ともっと伸ばさなければならぬ点をきちっと指摘して、次のステップに引き渡すことが、全ての選手に将来性を与えるための私たちの役目だと確信しています。

特に小学生年代ではプレーの失敗は当たり前なのです。失敗に対してのアドバイスや注意が最も指導者の悪いケースと肝に銘じるべきです。

## 私のサッカーの師匠

昭和58年、私は居住していた高崎市の山名町に少年サッカークラブを作りました。名前は山名フットボールクラブ。創立までの経緯はそう難しいものではなかったが、なぜ少年サッカーなのかという問いに対しての答えは、私自身にその必要性があったからといえます。

私のサッカー経歴は中学3年生からボールを触り始めてごく一般的な愛好家の道を歩むのですが、選手として指導者としてどうしても解明しなければならない衝撃的で魅力的なサッカーの出会いが3度ありました。そしてその都度もの狂おしい程サッカーに対する探求心が増幅されていきました。

1度目は昭和42年に来日した。パルメイラスと全日本の親善試合のテレビ中継でした。

(当時の日本のサッカーはイングランドのサッカー教程という指導書とドイツから招聘されたデトマール・クラマー氏の教えが主流で、基礎技術の繰り返しとスピードの養成がほとんどでした。) それまでのテレビ中継は東京12チャンネル(毎週)のダイヤモンドサッカーという番組でイングランドの1部リーグを放送していました。私もそう思っていたのですが、日本人のサッカーファンの大多数も(ボールを持ったらずばやく相手ゴールに向かう)速くて激しいものがサッカーだと認識していたのではないのでしょうか。ところがパルメイラスは11人が蹴鞠でもしているようにパスを繋ぎ、からだの全ての部分でボールを操り、頭合いを見てゴールに襲いかかるというものでした。

正直な感想は「あれは何だあ！なんであんなことができるのか？」(現在のブラジルは欧州型に近づき2度とああいうプレーは見られない) 私のサッカーが180度転換した瞬間です。

次の出会いは昭和48年のサロンフットボール。セルジオ越後がブラジルから来たところ、札幌大学のブラジル留学生を引き連れて全道(北海道全域)をまわって、いわゆるミニサッカーを広めるためにエキビジションマッチをしていました。我が大学もその相手になりましたが、この出来事も私にとっては天から降って湧いたような好機で、まさしくブラジルサッカーの脅威を肌で感じる事になりました。彼らに翻弄され、弄ばれた屈辱も去る事ながらブラジルの強さ上手さの根底にはこのサロンフットボールにあることがはっきり私にはわかりました。まさしくボールコントロールが日本人とは違い、体のバランスやリズムがボールと共に一体となっていました。

それでは私たちはその試合で何をしていたのかといえ、余裕の無いパス、無理やりなドリブル、まさしく単調なプレーで失敗を繰り返しては守りに入っていました。私にはどうしたらあのように上手になるかという秘密は全くわかりませんでした。6年前のパルメイラスをイメージして個人的には練習してきたのですが、実際に対戦してその差に啞然としたものです。

20歳になってしまった者にはブラジルの身のこなしは不可能に近いものでした。当然とも言えるのですが、大きなコートからはじめたサッカー選手は100m先にあるゴール

にいかにも速く到達して得点をするかという意識が先に立ち、今足元にあるボールに全神経を集中できない。子供のころから狭いスペースでやっているブラジルはトラップにしてもドリブルにしてもシュートにしても、すぐに近づいてくる相手からボールを奪われないうちに常に全神経をボールに集中させている。この違いが20歳になるころには全く異なるプレースタイルになってしまうことを痛感しました。

私の脳裏にはそれまでテレビの画面を拡大しただけのブラジルのプレーが映し出されてきたものが、このときから目を閉じると私の周りをブラジル人が走り回り、彼らの息使いを感じ物狂おしいほど胸が熱くなっていました。

はじめてブラジルのサッカーを見て以来、私の中に生まれた憧憬と疑問に対して答えてくれる者はいませんでした。その答えは自分で出さなければならず、必死に練習しました。ボールリフティング（ボールを地上に落とさずに足やその他の部位で突きあげること）と正確なキック（壁に向かって思ったところへ蹴る）の練習は毎日欠かさず、ただひたすらやりました。

ただ、わたしに必要だったのは、試合に勝つための技術や体力とか、より上級（当時は日本リーグ）へ行くための練習ではなく、いつかブラジル人と対戦するときは少なくとも互角に渡り合うためのボールコントロールでした。しかし、プレーヤーは（選手時代と言ったほうがいいかもしれませんが）自分の今の技量に満足しません。これは世界のトッププレーヤーも同じ事で、その競技をやめるまで上達しようと努力するわけです。

こような私に内在する矛盾は比較的若い年齢のときに私が選手生活をやめる結論に導いたと思います。特に大学を卒業したとき、そのチームから開放されたというタイミングもありました。短い選手生活（実質7年）ではありましたが、実績も残しました。高校時代は東京選抜に選ばれ―これは恩師の力添えがあったのですが―大学では北海道大会で3位になりました。

ここのとき準決勝で札幌大学（3人のブラジル留学生の中にアデマール・マリーニョがメンバーにいた）と対戦して負けたのですが、私には期すべきものがありました。打倒ブラジルで立ち向かったのですが、またしてもセルジオのサロンと同じ状態が繰り返られて彼らの前にあえなく降参でした。その年、札幌大学は全国大学選手権で確か早稲田大学（優勝）と準決勝で対戦して接戦及ばずベスト4になり、新聞でも北国札幌大学の健闘を称えていました。私は―沈黙考―眉間に皺を寄せて考えました。「札幌は3人では足りなかったか。」我が大学は勝ち進んで行くと常に札幌大学が待ち構えていました。私にとってこれは幸いだったかもしれませんが。というのも毎年毎回ブラジル選手のプレーを研究できたことです。先にも書きましたが、ボールを持った時の集中度は偵察している者も思わず体が硬直してしまいそうな凄まじさでした。また、相手のボールを奪いに行く時はシマウマに襲いかかるライオンようにどう猛になるのです。

こいう人間と戦うには余程の勇気が必要だと感じました。そして驚いたことに方が一相手に負けそうになるとナリフリかまわず阻止しようとするのです。いわゆる「きたないプ

レー」がとんでくる―まさしく飛んでくるという表現が当てはまるすばやいリアクションがあるのです。30年前の日本人にはフェアプレーは思想のようなもので余程感情的にならない限り「きたないプレー」はしませんでした。「彼らに勝つにはこの作戦しかない」という決意でいよいよ札大戦に望みました。といっても作戦は私の心の中だけのものですが。結果は先にも書きましたが、この試合で最高におもしろい場面が今でも思い出されません。

私はセンターフォワードで私をマークするのがブラジル留学生（マリーニョではない）でした。私の方に来るパスは常に彼との競り合いながら両者全力で追いかけます。「自分も猛獣にならないければ負ける」と思いながら必死でボールを追っていました。ほとんどブラジルにやられていましたが、2度絶好のパスが来たとき、あんのじよう飛んできました。

1度目は私が先にボールをさわり「よし完全に抜けた」と思った瞬間私の両足が宙に舞っていたのです。当然ファールの笛が鳴ります。そして警告。2度目は私が身体半分リードしながらボールを追いかけていたところ、突然私のスピードが出なくなっていました。なんと私のユニフォームをつかんで思いっきり引っ張ったのです。

しかしこのプレーが素早かったのか審判の見る角度が悪かったのか笛はなりませんでした。まんまとボールを奪われてしまいました。大声でアピールしても後の祭り。いよいよ私も意を決し、彼のボールを奪いに行きました。それも思いっきりユニフォームを引っ張りながら……。

すると彼は瞬間に私の袖をつかみ返し二人三脚のようななかつこうでコートの中を走っていました。私のファールで笛がなったのですが、サロンでの対戦の時は体に触れることもできなかつた悔しさからか、せっかくなだユニフォームを離すのがもったいないようですと握っていました。私には警告が出されましたが、留学生の彼はそれがおもしろかつたようで、私に近づいてきて「君はきたない」と誇らしげに言いました。

試合後チームメイトは負けたにもかかわらず「おまえとブラジルの戦いはおもしろかつたよ。本当に喧嘩しているようだったぜ」とこの話題で持ちきりでした。私のブラジルとの対決はこれで終わりました。と同時に以後専門的なサッカーの練習は自分自身では行わない。つまり選手生活にピリオドを打つことになったのです。

しかし、学生時代に明らかになった課題は私のライフワークとして今日まで続くこととなるのです。

## ボールリフティングの不思議

リフティングとはボールを突き上げることです。サッカーの練習でやるときはボールを地上に落とさず、はじめは足の甲だけで連続して突き上げます。左右交互の足でつくのがバランズとしては良いのですが、利き足専門でやる子供もいます。そこはあまり気にしなくても、上達した段階でこちらからより多くの体の部分を使ってやる注文を出せばいいのです。最終的には曲芸師にでもなったかと思ふようになるはずです。

一人で練習するのが非常に効果的で、かなり回数ができるようになれば、二人以上何人でも輪になってやるとおもしろくて夢中になってしまう。おそらくブラジルはこの練習に余念がない、あのパルメイラスのプレイはきつとボールリフティングの賜物なのだ。

私をはじめこのプレーを指導したのが大学2年になったときでした。新入生の一人に全くサッカーの未経験者がいたので。名前は田村隆。

彼は卓球の北海道高校チャンピオンだった。彼の指導係が私に回ってきてしまった。

「なぜ、卓球をやらない？」

「もう飽きた！」

「なぜ、サッカーなんだい？」

「サッカーが面白そうだし、俺にもできそうだから！」

私の心配をよそにあっさりと言ったのけた。

北海道の人間は大らかで人なつっこい反面、平原のように落ち着いている。

「それじゃー、クラブの練習が終わったら体育館の隅でリフティングをやるう」

「おー！」

彼は「はい」とは言わず、雄たけびのような声で答えた。

それから2年間毎日のように練習後2人でリフティングを繰り返した。私自身もそれまで連続百回はできるようになってはいたが、100を超えると急に頭の中が重くなり、集中力を欠いてポトリと落としてしまっていた。1時間もやると悔しさと疲労感で、いくらやっても20回だとか30回で終わってしまう。田村も半年で50回以上はできるようになっていた。練習の最後にどちらが多く突くか競争をして終わりにした。(いつも俺の勝ち)

ボールリフティングはどういう角度でボールが足にあたって突き上げるときは体の正面の、腰のあたりに突き上げていけばリズムも一定になり何回でも落とさずにやれる。集中力が切れると足の当たり所が悪くなり、ポーンと高く蹴ったり、足の上で弾まずにポトリと落ちる。それを最小限にいとめるのが集中力になる。頭や肩やモモといるいろいろな場所を使うとなったら集中力を通り越して本当にサンバのリズムに乗ってなければ出来ない。

ボールを良く見て落下の位置を把握して足を出す。さわる瞬間に落下の力(速度)を感じ、足に込める力を決めて腰の高さまで蹴上げる。少しでもそれが狂って高すぎたり低すぎたら、即座に修正して元に戻す。リフティングとはこういうものと悟りかけたとき、私は500回に達していたのだ。

自分の意思でボールをコントロールしているときは集中力に限界があり、その限界が100回くらいだったが、あるとき何も意識しないうちに500回に達してしまった。こういう現象は生活の中にはよくある事なのだが改めて体験すると、まったく不思議としか言いようがない。

生理学的にはボールに触れた瞬間、知覚神経から来た感覚を大脳の知覚野で受け、それを運動野で統合してどうキックするかを決定して、その指令が末梢神経を介して各筋肉に伝えられボールをコントロールする。練習していて突然スイッチが切り替わったように、何も考えずに出来てしまった。いわゆる、体が覚えた。反射の回路に切り替わったということだ。当然大脳皮質からの意思の介在はあるけれども、末梢から中枢の神経経路にリフティングをするときの力や角度の係数が決定され、一定の信号が筋肉に伝わるネットワークが構築されたといえる。意思が中止命令を出さない限り、また筋肉の疲労や外界からの要因がなければボールを突きつづけることができるといえる。

もうすぐ1年になろうとしていた。500回達成。自己最高記録。その喜びのあまり「やったー！」と大声をあげた。

「おい、たむら〜！500回やったぞ〜」

彼はリフティングを中止して、にこりともせずに、

「おらさー、700回越したぞ」

「……………!?!」

「なかむらさん、勝負するべ、どっちかさきさ1000回行くか」

「よし、やるべー」

私はもうすでにレギュラーで試合に出ていたが、彼に経験をつませるために、先輩に頼んで後半の10分くらいから私と交代させてもらっていた。確かにトラップも、パスも正確になっており、あとは試合に慣れるばかりに成長していた。

今思えば彼は私の交代ではなく、私と一緒に出場することを願っていたのだろう。

先輩後輩はあるけれど1年中、朝から晩まで（練習が終われば2人で飲みに行く毎日）ツルンデいたのだから、試合でもコンビを組みたいと思わずにはいられない。私も彼とやりたかった。

サッカーとは結局、試合におけるボールコントロールとアイデアに尽きる。

経験とか年功で勝てるわけがない。タムラはボールを蹴りながら、自分の試合の活躍する姿を思い描いていたのだろう。しかし、レギュラー争いは熾烈だった。1年生のサッカー初心者なんぞに、どうして負けられるか。先輩全員がそう思っただけに見せ付けるべく、本気なプレーをやりだしていた。

いよいよ勝負の時が来た。相撲の立会いと同じで両者このときとばかりにはじめた。

「やるか」

「よーし」

ジャンケンで私が最初にやることになった。相手が数をかぞえる。700回はやらないと負

ける。

だいじようぶ。私には500回以上の反射回路が出来あがっているのだから、あきらめずに続ければ勝てる。

1回、2回、3回、500回、501回、999回、1000回……。

「やった〜!」「自己新!」「ど〜だ」

しかし、喜びもここまで。次にはじめたタムラは1000回を越し、2000回を越した。

「……………」私は数をかぞえきれなくなった。

私が5年もかかって到達した1000回をこいつは1年もかからずに越した。完敗だった。

目的とか目標を持った集中力は思いのほか短期間で神経経路を形成する。迷いや他のことを意識しているときに集中力は要をなさない。抽象的なやる気ではなく、具体的な目標がその人に内在する力を引き出すのだろう。

体育館の2階のテラスでは私たちの勝負をサッカー部の先輩たちは以前から察知していたらしく電線の雀のように並んで見ていたが、タムラの勝利の瞬間、大歓声と拍手で体育館の中は何があったのかと他のクラブの選手も静止してしまった。

彼と私はそれ以来コンビを組み、大学北海道大会3位を勝ち取る。また、タムラは地元に戻り専門の卓球を今も指導している。

—リフティングの達人の話—

日本のボール文化は奈良時代から延々と1000年以上も続いている。ペレやジーコで驚いてはいけない。平安時代には藤原成道という人がいました。

今風に言う蹴鞠(けまり)の選手になって20年(七千日)、休まず練習したのが6年(二千日)。千日目にはボールを300回突いたといえます。この辺は私より幾分上達が早いかな。

しかし、その後がすごい。

千日修業の祝賀にお供えと鞠を神棚に奉納して拝んだ。

するとその晩、鞠の神様が姿を現し、成道の精進を称えてワザをもっと高めてくれる約束をした。それからの彼は京都の清水寺にお参りに行ったとき、舞台の欄干に飛び乗ってボールを蹴りながらそこを往復してしまった。

また、熊野神社に参拝したときには、神殿の前で後ろ向きのリフティング(踵で行なう)を200回やってしまった。

彼がまだ若いときに、父の家の庭先で練習していたら、ボールが家の中に飛びこみそうになってしまった。父もその縁側にいたので土足でとりに行くわけもいかず、とっさにオーバーヘッドキックをしてボールを蹴り出した。

成道名人が言うことには、ボールに向かったら気をそらしてはいけない。

「ひとへに鞠に心を入れよ」

また、たしなみとして、得意げに人に教えようとしたり、うまくできないからといって



苦々しい顔をしてはならぬ、いつも心にゆとりを持って行なうべしと説く。

サッカーの神様は900年前からこの日本にいたのです。

「リフティングがいくら上手でもサッカーの試合になったら別だ」という意見。確かにそのとおりだと思います。その回数でサッカーのうまい下手が決まれば、日本一うまい選手も決まってしまうです。

私は少年たちにリフティングを教えるときに、こう言います。

「ボールの音が聞こえてきたか？」

「きこえなあらい」

「コーチにはきこえているぞ」

「ほんと々？」

サッカーのボールは無理やり扱われるのをとつても嫌がりません。みなさんもサッカーの試合を見ているとそれが良くわかります。あの選手はボールの音が聞こえているとか、ボールが嫌がっているとか。

本当にボールとは不思議なものです。プレーがうまくいっている時のボールはほんとに嬉しそうです。

## ボールでおどろけ

昔、剣道の先生が剣の極意を学生に語っていたのを思い出しました。剣道には剣の打ち込みの間を「先前の先」「先先の先」「後の先」などと言って攻撃を現す言葉があります。相手の隙を突くタイミングを読む心得とでも言うのでしょうか、先に極意を教えられるとチャンバラの切っ先も動かなくなってしまう記憶があります。

サッカーも敵対動作がほとんどですので、ボールを保持したとき相手を抜くプレーが剣道に通ずるところがあると常々思っていました。サッカー選手の場合、ボールを受けて味方にパスを出す、またはシュートする一連の動作を試合中にいかに確実に成功させるかが問われるのです。

「子どもの質問に良くあるのが「どうしたら上手になるの？」私は「相手にボールをとられるな」と答えます。

私は子供の指導中にこの間を体得しました。小学生低学年（はじめてサッカーをすることもち）を相手にしながら、まずミニゲームを行ないます。コートのはしは10m四方（コートを描かなくても簡単なゴールをおいてもいい）で充分です。コーチ一人対4・5人が適当。

キックオフは子供チーム。すると大概全員がボールにくっついてきて攻撃します。私は最初からゴールの前に立って待っています。全員うれしそうに攻めて来る。「おれにシュートさせる」「ぼくにも」と仲間割れをはじめ、私は「さあ来い！」と挑発します。それを聞く子供は私の前まで突っ込んできてシュートをかならず打ちます。それも決まってコロコロというシュート。私はそれを受けてその場で相手の無人のゴールに丁寧にシュートをして、「1対ゼロ」とことさら得意げに喜びます。「……………」

すると、子どもはゴールキーパーを決めてくる。私は子どものミスを待ってカウンターアタックを狙って、そしてキーパーと1対1になるのですが、シュートを打たずに追っかけてくる子を待ちます。私がボールを持っているとみんなが群がってくるので、横へ行ったり自分のゴールへ下がったりと追いかけてこっこが始まります。

ボールを奪われてしまった場合は全力で追えば守れるのですが、あえて後ろから「まで」と追いかけていくと、鬼に襲われたかのように驚いて逃げまわる。シュートしても慌てているから滅多に無人のゴールには入らない。まあ、サッカーというより「追いかけてこっこ」ですが、私はリフティングをしながら進んだり、群がる子どもを払いのけたりとだんだんゲームは熱くなって行きます。私の持っている技術を全て披露するわけです。

私の子供だましの得意技は「ボールを片足で地上に押し付ける」プレーです。押さえ付けると子供のキック力ではびくともしません。おもしろいのは私のまわりを取り囲んで一斉に蹴るものですから何処にも飛びようがありません。こんなゲームを毎回練習で行ないます。勝ったり負けたりで子供は大騒ぎです。一人で勝てなくなったら、いよいよ私もチームにまざります。

このはじめての試合は子供にとっては刺激的なものらしくコーチは恐ろしいと感じ、鬼を退治してやろうという位に夢中になります。

ここで指導者の話に戻りますが、真剣に勝負すれば大人のスピードと力ですから話になりません。それこそ大人げない。純粹にボールさばきで対決していると、指導者の私の方に変化が生まれ、子供の素直な動きが見えるようになってきました。間というものがわかって来たのです。

子供だましの「片足押し付け」をやっているとき、群がる子供の全ての足が瞬間止まるのです。この一瞬をとらえて脱出する。この機を逃すと子供は私にひっからまってきて身動きできなくなり、ボールは何処かへ蹴られてしまい、私の負けです。一瞬の停止がいわゆる間であり、即座に打って出る好機なのです。

私自身が知らず知らずにサッカーの根っこのところを経験していました。

—子供に教えられた—

今までの指導は何だったのか、自責の念にたえませんでした。紋切り型の技術練習や選手の意思を無視して指導者の観念を植え付けることは指導とは言えません。かえってその子の芽を摘んでいたのです。私は試合中でも練習中でもそういう指導者の空しい叫びを未だ耳にします。残念でたまらない。

小学生年代の指導者に問われているには、選手にこの「間」を感知する能力を引き出せるかどうかなのです。

私は「蹴り返さないで、ボールをとめなさい」と常に言うことにしました。それをしないとおこります。それをしないと間はいつまでたっても察知できないからです。止めた後の判断は選手の最も良い場面なのです。見せ場です。「間」はこのときに体得するのです。

—失敗を責めるな、成功の数をかぞえている—

トップを目指すにしろ、地元のチームでやるにしろサッカーの基本はこの「間」を知ることではないだろうか。

## いじめなんてこわくない

〈母親の手紙〉

お世話になります。2年生Fの母親です。

実は、だいぶ前になるんですが、3年生に集団でいじめられたらしくて、サッカーは辞めるといつて、聞かないのですが退部はできますか？

よろしく願います。

ご迷惑ばかりかけてすみません。

いじめは大人から子供まで現実にあるのです。いじめを無くすという力の発現は何処かにひずみを生じさせます。これも、私の指導中の経験ですが、私の力でいじめをなくすことで表面上は平穏を保つように見えるのですが、子供に生じている軋轢は深く潜行していくようです。見た目は仲のいいクラブに見えるのですが、中学へ行くと仲間関係が表に出てきて、崩れていくようです。20年も苦労しているのですが、親と子と世間のしがらみで必ずこの問題が噴出します。気を抜けないし、克服しなければならぬ問題です。

いじめが社会現象のように世間を騒がせはじめたのはいつの頃だろうか。40年前はいじめという総合的な概念はなく、「いじめる、いじめられる」という行為を指していました。「仲間はずれ」「わるぐち」「ひいき」「しかえし」「けんか」「なかつ、なかされる」「いいつけ」などは日常茶飯事で学校の先生も学業の半分も携われなかったのではないのでしょうか。いわゆる反社会的な子供の行動はどうして起こるのだろうか。この正体を解き明かさないと、「いじめ」を単純に否定して、あたかも伝染病を根絶するかのような風潮が出来あがってしまうことになる。例えば、ある子供がいじめられたと言ったとき、それを聞いた大人は「いじめ」と解釈し、それはいけないことと短絡的に結論づけてしまう傾向にある。ここは注意してかからないといけない。

私はどうしていじめたり、いじめられたりする行動が子供の集団には頻繁に起こるのかと考えていたとき、時実利彦先生の著書「脳の話」―岩波新書）を思いだしました。

―情動とはなにか、「私たちは、人間におのずから具わっている生物的欲求の心にかりたてられて、たくましく生命活動を推進している。この欲求がかなえられないと不快感をおぼえ、かなえられると快感を覚える。不快感がつると、怒りの心に発達し、さらにこうじると、怒りの行動へ爆発する。……また一方では、欲求が強くはばまれ、基本的生命活動がおびやかされるような事態になると、不安とか恐怖といった心がおこり、回避したり、逃走したりする……この心を情動と呼ぶ。」「あらゆる情動の体験は、まず大脳辺縁系で形成されていると考えてよからう。そして、その体験は、視床下部に具わる表出の仕組みによって、体性神経系や自律神経系を働かせて、具体的な行動として表現されるのである。」―

大脳を風船にたとえると大脳辺縁系は空気の入りの口付近にあたり、哺乳動物においてはこの部分がヒトと同じように発達しているが、ヒトの脳に限っては大脳新皮質の部分がそれ以上に膨らんで発達したといえる。また、大脳辺縁系の神経中枢が司る「運動や感覚は、

固体維持と種族保存の営みを推進する、本能的な心の形成と具現に直接関係している。」と  
時実先生は記しています。

本能という点では動物も人間も自然環境に適応しようとする行動の中枢は発達している  
が、情動をコントロールしてヒトが人として生きて行くには、非常に発達した大脳新皮質―  
高等な精神活動やより良く生きようとする創造性をつかさどる神経中枢が重要な役割を担  
っている。

私が携わる子供たちの大脳は成長段階でたくましく生きる生命活動を営み、と同時に人  
として生きる高度な精神活動を形成しようとしているのです。

「こういうふうと考えてくると、「いじめめる」という行為は子供の正常な発達のしるしです。  
むしろ、「いじめ」というジャンルをつくって、あたかも異常な社会現象のように説明して  
しまうのは、大人の想像力の無さを現しています。

生まれてからすくすくと感情を発達させてきた子供も、やがて児童期を迎え集団生活を  
覚えなければなりません。そのとき当然本能的な自己を主張します。そして、うまく折り合  
いがつかないと不快を覚えて、自分の優位性を確保するために「いじめめる」「仲間はずれ」  
「わるぐち」「ひいき」「しかえし」「けんか」「なかす」「いいつけ」などの行動に出ます。  
しかし、人間はそれではいけないのです。この本能的情動をコントロールしてより高度な精  
神活動を発達させなければなりません。

しかし、たくましく生きる力を獲得しても、人間の社会集団は思い通りにはいかない複雑  
さと、時を待たない進歩性があります。この社会集団に順応し、いずれは社会を支え牽引す  
る人間になるための準備段階が、まさに小学生年代と言えないでしょうか。学校という集団  
生活の場は子供達にとっては現実であり、実社会の始まりな訳です。

―二つの内在する矛盾―

とはいっても、いじめやそれから派生した少年の問題は益々深刻化していることも事実  
です。そして、その解決の方法を学校教育（知育、徳育、体育）の場に求めていることも教  
育現場をただただ混乱に陥れている原因ではないでしょうか。

「ここで考察したように、人間はよりたくましく、より良く生きるふたつの矛盾した精神を  
発達させなければなりません。ただし、学校教育の現場は理性（よりよく生きること）の学  
習の場であり、生きるための本能的欲求の充足方法を学習する場ではないのです。知識や理  
性を、また社会通念の良い行いを学習し、体験したとしてもよりたくましく生きる（大脳辺  
縁系）ための人間の内なる声とよりよく生きる（大脳新皮質）理性の声が、相反する行動を  
強いることがしばしば起こり、終生私たちの心に葛藤を生み、時には苦しみにもなります。

反面、「武士は食わねど高楊枝」といって路頭に迷う人もいるし、「地獄の沙汰も金次第」  
と金庫を抱いて死ぬ人もいる。まったく身につまされる問題です。

相反する行動のもう一方、学校教育では不可能なよりたくましく生きる力をつける場所  
が「遊び」。

〈コーチの手紙〉

「返事遅くなりまして申し訳ございません。

3年生にいじめられてそうとうつらい思いをさせてしまったようですね。私の怠慢をお許しください。

じつは3年生も4年生にいじめられているのです。元気な男の子の集団はこうやって折り合いをつけていきます。

いじめられた報告は今年度で3回目です。その都度、「それでもサッカーが楽しく通うようなら様子をみてください」と頼んでいます。

というのも子供が成長する場所は学校という教育の場と、自然からおくられた遊びの場とふたつの場所があると考えております。

学校の場合はいじめる方がいけないと教えるのですが、山名FCは後者の立場で考えております。

けんかとか、いじめたり、いじめられる行為は子供の感情の発現で、そういう軋轢を経て集団の中での自分を作り上げていきます。

こういうナイーブなこころの形成時期に大人が強制的に立ち入って、解決を急ぎますと感情をコントロールするこころの発達が遅れます。

できるならば「両親がなぐさめ、勇気づけてやっていただければ子供も元気を取り戻すとおもいます。

低学年のうちに大いにけんかをする事は生きる力をつけている証拠です。退部はそれからでも遅くはないとおもいます。

コーチは待っているとFくんにお伝えください。みんなも待っていると。くれぐれも3年生に負けるなと勇気づけてやってください。

ここで登場するのがカイヨワ先生の「遊びと人間」です。その師、ホイジンガ先生になると人はホモ・サピエンス(賢い人)ではなく、ホモ・ルーデンス(遊戯人)と銘々したほどです。―ちなみに、その著書「ホモ・ルーデンス」(高橋英夫訳)は難解でまったく解読不能でした。うっすらとわかったことは、人間は終生遊び、人間社会の活動がそもそもすべて遊びである。(これでいいのかな自信ありません)―

いじめるという行動がどうやら人間の原始的な生命力の根源であることがわかって来たのですが、カイヨワ先生の定義する、

遊びは自由で他人から強制されず、魅力的で楽しい気晴らしという性格を持ち、自発的な活動。

遊びは本質的に生活の他の空間から分離され隔離された活動。  
あらかじめ活動の展開の仕方や結果が分かっている活動。

財産も富も、いかなる種類の新しい要素も作り出さない活動。

そこだけに通用する新しい法律を一時的にたてる約束に従う活動。

全くの非現実という特有の意識を伴う活動。

という世界で子供は情動を発現させ、それをコントロールさせながら集団の中で順応する能力や創造性を自ら発達させている。

スポーツが遊びということは自他ともに認めるところなのですが、遊ぶ者が自由で他人から強制されないこと、また非現実という意識の中で行なわれなければ、遊びが遊びでなくなってしまうことも考えなければなりません。

ホイジンガ先生はスポーツと限定して「古来からのスポーツの遊戯性は個人で競おうが、集団でしようが、勝負がついた時点でその遊戯は完結している」という。しかし現代スポーツ（20世紀初頭）は「スポーツが社会機能として、社会の共同生活の中で次第にその意義をおし広げ、次々と大きな分野を、その領域の中へ引き込んでいく。」そしてプロ選手が出現して「彼らのあり方は、もはや真の遊戯精神ではない。そこには自然なもの、気楽な感じが欠けている。」「こうして、現代社会では、スポーツが次第に純粹の遊戯領域から遠ざかっていく。」と結論している。——ここで大きな分野とは社会経済や教育や政治にまで関係してくることだろう——

ホイジンガ先生から一世紀後、子供の遊びの世界にまで遊戯性を失ったスポーツが入り込んできたのです。少年指導のいろいろな意味付けは成されていますが、いま子供たちのやっているスポーツは遊びの要素がなくなってしまう、本来のスポーツでは無いことが理解できるでしょう。

○こどもにとつてはいじめることやけんかは最も大切なことで、おとなはそこに立ち入ってはならない。

○こどもが上達しようと努力しているところへ行つて、口をさしはさむこともやめるべきだ。

○指導者に敬意をあらわせることもやめるべきだ。

○上手い子と下手な子を分ける必要も無い。

○礼儀を教える必要もない。

○やる気のない子を叱ることはやめるべきだ。

○子供の聖域に入るときは最大限ガキ大将になることだろう。

もし指導者として子供の前にたつならば、その仕事は子供の安全を最大限に考えサッカーという遊びを、楽しんでいくか見守ることに尽きる。

山名FCのサッカーが本来の遊びのスポーツを行なっていれば、そういう行動は消えていきます。いじめることから始まり、喧嘩がおこり、6年生にもなれば、自然に子供同士で高級な戦術を話しあうようになるはずです。

〈母の手紙〉

Fに伝えました。

行つてみようかな？と言つてましたので、

もうすこしたら自分から行つてみると思いますが、

よろしくお願いします。

## 飛行少年

いじめにつづいてもう少し話を進めることにします。

子供の将来を予見することは難しいことです。ここが児童の心理はブラックボックスと言われる由縁です。

サッカーで彼らの精神の発達がすべてうまくいくかといえば、それは無理な話です。成人に比べればプレーの技術が未発達なように、精神活動も当然未発達な部分が大いにあるはずです。

一見、落ちついた仲間関係を築いているように見えても、欲求がかなえられない不快感をどこか漂わせている子供たちを見ます。よりたくましく生きるころと、よりよく生きるころがバランスを保って発達している子供は内部の葛藤はあるにせよ中学、高校、就職なり進学と比較的順調に社会に順応していきます。目を見張るぐらいに才能を開花させる子もいますが、そのバランスが調整できずに中学から高校にかけて情動を爆発させたり、現実から回避したり、逃走したりする子供が出てきます。私はそういう少年を非行少年とは考えずに飛行少年と考えています。

この兆候は小学校6年生の一年間で、私には手にとるようにはわかりません。サッカーが遊びの場のはずなのですが、そういう子供は外部の何らかの圧力で自由を失っているのです。私の指導のまずさも当然ありますが、サッカーに取り組む姿を見ると、お稽古としてむりやりやっているように見える者と（自分の意思でサッカーをやめると言える子は立派だ）、好きで夢中になりたいのに制止がかかっているように見える者の二つのケースでした。とり越し苦労であればそれなのですが、どうやらそうでもないようで余計に胸が痛みます。これはサッカーを通して私が見た彼らの姿です。

可哀そうなのは、爆発しながらでも体育館のフットサルに顔を出します。また仲間になりたいのですが、体育館のフットサルはすでに少年の頃の遊びとは違う大人に近づいた遊びになっているものですから時すでに遅し。

やがて高校を中退し飛行少年となって自由な空を駆け回ってくるのです。

私に今出来ることは体育館でフットサルを続けて待つことだけです。

もう何人もここへ帰って来ました。

立派な大人になって。



## 保健体育審議会

ここで我が国のスポーツ政策を覗いてみたい。昭和47年の保健体育審議会の答申以来、体育教育とスポーツ振興政策が平成12年度になって大幅に見直されました。21世紀に向けてのスポーツのあり方を打ち出していますが、その中から青少年のスポーツによる育成を考えてみたいと思います。

特に現代社会の流れからスポーツにあつては、国際競争に勝つべく競技力向上が謳われています。またサッカーのJリーグの波によるものか、スポーツのプロ化を念頭において

るのが目新しい。その具体的施策に総合型地域スポーツクラブの設立と一貫指導システムの構築が新たに答申されています。長い参照ですが抜粋をここに載せます。

文部科学省 体育局体育科

保健体育審議会 答申(2000.08)から

スポーツ振興基本計画の在り方について―豊かなスポーツ環境を目指して―(抜粋)

総論

### 1. スポーツの意義

スポーツは、人生をより豊かにし、充実したものとするとともに、人間の身体的・精神的な欲求にこたえる世界共通の人類の文化の一つである。―体を動かすという人間の本源的な欲求にこたえらるとともに、爽快感、達成感、他者との連帯感等の精神的充足や楽しさ、喜びをもたらし、さらには、体力の向上や、精神的なストレスの発散、生活習慣病の予防など、心身の両面にわたる健康の保持増進―

また、スポーツは、人間の可能性の極限を追求する営みという意義を有しており、競技スポーツに打ち込む競技者のひたむきな姿は、国民のスポーツへの関心を高め、国民に夢や感動を与えるなど、活力ある健全な社会の形成にも貢献するものである。

更に、スポーツは、社会的に次のような意義も有し、その振興を一層促進していくための基盤の整備・充実を図ることは、従前にも増して国や地方公共団体の重要な責務の一つとなっている。

ア) スポーツは、心身の健全な発達を促すだけでなく、それを通じて、青少年は自己責任、克己心やフェアプレイの精神を身につけることができる。また、仲間や指導者との交流を通じて、青少年のコミュニケーション能力を育成し、豊かな心と他人に対する思いやりをはぐくむ。さらに、様々な要因による子どもたちの精神的なストレスの解消にもなり、多様な価値観を認めあう機会を与えるなど、青少年の健全育成に資する。

イ) ―人間関係の希薄化などの問題を抱えている地域社会の再生にもつながるなど、地域における連帯感の醸成―

ウ) ―スポーツ産業の広がりと共にそれに伴う雇用創出等の経済的効果を生み、我が国の経済の発展に寄与―

エ) ―国際的な友好と親善―

このよう―国民一人一人が自らスポーツを行うことにより心身ともに健康で活力ある生活を形成するよう努めることが期待される―スポーツをみて楽しむことやボランティアとしてスポーツの振興に積極的にかかわりながら、自己開発、自己実現を図ることができる。

○総合型地域スポーツクラブの全国展開  
到達目標

・2010年(平成22年)までに、全国の各市区町村において少なくともひとつは総合型地域スポーツクラブを育成する。

・2010年(平成22年)までに、各都道府県において少なくともひとつは広域スポーツセンターを育成する。

現状と課題

(スポーツ環境の現状と課題)

(総合型地域スポーツクラブの必要性)

「総合型地域スポーツクラブ」とは、地域住民が主体的に運営するスポーツクラブの形態である(別図1参照)。我が国では、身近な生活圏である中学校区程度の地域において、学校体育施設や公共スポーツ施設を拠点としながら、地域の実情に応じて民間スポーツ施設も活用した、地域住民の誰もが参加できる総合型地域スポーツクラブが定着することが適当と考えられる。特に学校体育施設は地域の最も身近なスポーツ施設であり、住民のスポーツ活動における期待は大きい。なお、総合型地域スポーツクラブを育成することは、完全学校週5日制時代における地域の子どものスポーツ活動の受け皿の整備にもつながり、さらには地域の連帯意識の高揚、世代間交流等の地域社会の活性化や再生にも寄与するものである。

総合型地域スポーツクラブの特徴は、以下のとおりである。

ア 複数の種目が用意されている。

イ 子どもから高齢者まで、初心者からトップレベルの競技者まで、地域の誰もが年齢、興味・関心、技術・技能レベルなどに応じて、いつまでも活動できる。

ウ 活動の拠点となるスポーツ施設及びクラブハウスがあり、定期的・継続的なスポーツ活動を行うことができる。

エ 質の高い指導者の下、個々のスポーツニーズに応じたスポーツ指導が行われる。

オ 以上のようなことについて、地域住民が主体的に運営する。

(地方公共団体)

総合型地域スポーツクラブの育成を図るため、地方公共団体においては、次の事項にも配慮しながら、国と連携する施策やその他の独自の施策を自主的・積極的に行うなど、多様な

施策を地域において総合的に展開することが期待される。

ウ 市町村は、総合型地域スポーツクラブの育成を積極的に推進すること。特に、総合型地域スポーツクラブの創設の核となる熱意と能力のある人材を、地域住民の中から得て育成すること。なお、我が国の総合型地域スポーツクラブは、中学校区程度の地域ごとにあることが望ましいが、育成の初期段階においては、地域の実態に応じて多様な規模の総合型地域スポーツクラブが形成されることも考えられる。

また、総合型地域スポーツクラブの活動拠点となる地域の公共スポーツ施設の充実を図るとともに、学校体育施設の開放、地域との共同利用※2を一層促進すること。その際、地域の実情に応じて活動施設のひとつとして民間スポーツ施設の活用も考えられる。

さらに、クラブハウスの整備を推進すること。なお、クラブハウスは新たに建設するほか、学校の余裕教室や既存の公共スポーツ施設を積極的に活用することによる整備が考えられる。

#### 一貫指導システム※5の構築

現状と課題

—現在の育成方法を見直し、優れた素質を有する競技者が、指導者や活動拠点等にかかわらず一貫した指導理念に基づき、発達段階や個人の特性に応じた最適の指導を受けることにより、トップレベルの競技者へと育成されるシステム(以下「一貫指導システム」という。)を各競技で構築する必要がある。

一貫指導システムの構築に当たっては、競技団体が、国際的な競技者育成の動向等を踏まえ、トップレベルの競技者を育成するための指導理念や指導内容等を発達段階の特徴や技術水準に応じて明確にし、各地域の優れた素質を有する競技者に対してこの指導理念等に基づく高度な指導を継続して行うことが不可欠である。

また、一貫指導システムが円滑に機能するためには、競技者が日常トレーニングを行う学校等における指導内容と競技団体の指導内容とが大きく異なり、競技者の効果的な育成に支障が生じないよう、学校、(財)中学校体育連盟や高等学校体育連盟などの学校体育・スポーツ活動の振興を図る団体(以下「学校体育団体」という。)及び総合型地域スポーツクラブをはじめとする地域スポーツクラブと競技団体との十分な連携を確保することが必要である。

#### ※2 学校体育施設の「共同利用」(P9)

地域住民の最も身近なスポーツ施設である学校体育施設について、単に地域住民に開放するのではなく、教育委員会の管理責任の下に、学校教育活動との十分な調整を図りつつ、総合型地域スポーツクラブをはじめとする地域住民の意見を聴きながら、積極的に地域のスポーツ活動にも利用できるようにすること。

#### ※5 一貫指導システム(P16)

スポーツに初めて出会うジュニア期からトップレベルに至るすべての過程で、個々の競技者の特性や発達段階を適切に把握し、それぞれの段階に応じた最適なトレーニングを行

うことによつて、競技者の有する資質・能力を最大限に引き出し、最終的に世界レベルで活躍できる競技者に育成・強化するとともに、その過程で競技引退後の指導者等としての活動にも配慮した指導を行うシステムをいう。

ドイツやイギリスでは1960年代から政府主導の「みんなのスポーツ」政策が研究、実施されてきました。ドイツでは「ゴールデンプラン」としてスポーツ、レクリエーション施設建設が促進され、イギリスでは政府により「The Sports Council（スポーツ審議会）」が70年代に設立され、やはり施設の建設を促進させました。（世界の国民スポーツ 不昧堂新書）

おそらく日本の体育スポーツ政策もこれに習っていると思われませんが、はたして4半世紀遅れた出発となるのでしょうか。ただ、彼の国の長いスポーツの歴史は自然的に発生したサッカーのプロクラブ組織が総合型地域クラブの形態を成し、他の種目の運営費にサッカーの試合の興行収入を当てて現在に至っていると聞いたことがあります。当然そこでは各種目の競技力向上の研究もなされ、指導法の体系も確立されました。

ここで日欧の比較検討は意味をなしません、ヨーロッパでは地域に根ざした民間のクラブが長い時間をかけてスポーツを育んで、国家がその補助をしているという図式がわかります。

私たちの国に目を向けると、概ね政府の言うことを簡単にまとめると、オリンピックで金メダルが少ない。

全国に芽生えた細かいクラブ組織を、各市町村で総合型地域スポーツクラブに年代も種目も全てまとめなさい。施設は資金を出せないで今までのようにやりなさい。クラブハウスはまとまれば、市町村で一個くらいは作ってもいい。なお、我が国の総合型地域スポーツクラブは、中学校区程度の地域ごとにあることが望ましいが、地区教育委員会の言うことを良く聞いて学校を使用しなさい。一貫指導は民間人ではまだ心配なので、学校の先生と良く相談してやってもらいたい。

私に言わせると、小さい頃、むかし、放課後や日曜日に近くの広場で近所のお兄ちゃんや友達とやった、三角ベースの野球や相撲の楽しかった想いでは、もう、今の子供には味わえない遠い昔のことなんでしょうか。青少年の健全育成たるや何をか言わんや。

## 三振まえのバカあたり

昔を思い出したところで、野球にも不思議な話がありました。いえ、まだ私が子供の頃のことですから今もあるのかどうかわかりませんが。当時はスポーツといえは野球の時代。

「三振前のバカあたり」という野次(やじ)が的を得て妙な言葉なのを今でも忘れません。小学校の頃は正式な試合などやったことがありませんでしたが、男の子が集まると野球でした。たいがい、となりのクラスに試合を申し込んで、勝った負けたと騒いでいました。相手のいかつい強打者風の子がバッターボックスに立つと、守備の者はみんな後ろへ下がります。ヤクルトのブンブン丸のごとくです。何度もホームランを打たれて痛い目にあっているのも、また打たれると観念しているが、ツー・ストライクになって「ボカーン」と飛んだ球がファールになると、俄然守備陣は「三振まえのバカあたり」とはやし立てます。すると次のボールは決まって空振りになるので、我々は大喜び、打者はバットをたたきつけて悔しがるのでした。

どうしてそうなるか、今でも深くは考えたことはないのですが、ぼくにとってこれは不思議な真理でした。その他にも、ラッキーセブンとか野球はツードンからとか、野球の面白みが私の中で格言になっていました。

そういう言葉は試合を多く経験してくると、試合の中でいま何をすべきかが自分の頭の中で整理されてきて、自然に生きてくるものです。もちろん、監督などいないので、サインなどありませんでした。結局、勝つ喜びを得るためには、自分にチャンスが来たときにどうすればいいのか、その局面でどういうプレーをすれば良いのかを、野球の本質をうまく表現した言葉が教えてくれました。もちろんポジション争いもありましたが、「おまえはデカくてピッチャーが投げやすいからキャッチャーをやれよ」と言われれば嫌でも納得してしまつた覚えがあります。

私がここで言いたいのは、「三振前のバカあたり」が不思議なのではなくて、12歳ころまでに自分でもわからないうちにルールを覚え、野球のかなり奥の深いところまで学習するようになったということ、精神の発達がいかに不思議なことかということ、です。

サッカーも同じことで、

少年の指導者になるのなら、表面の技術や体力をつけさせる指導よりも、子供が夢中になつてできる、また、自発的に工夫してやれる環境をこしらえる方法を考えることです。

やがて、小学校生活最後の夏休み、地元のクラブチームがぼくらの野球好きに目をつけたのか、少年野球の大会に出ないかと誘ってきました。普段の出たがりたちは喜んで入部しました。名前は40年たった今でも覚えています。「VICTORYS」

しかし、そこは少年野球のクラブではなく、中学生年代の本式のクラブだったので、小学6年生にとつては地獄の一丁目でした。私の仲間たちは入る早々から、根性を鍛えるためと

先輩の練習中に一列に並ばされて、中腰でつま先だちをしながら声を出さなければなりませんでした。声が小さいと先輩が来て「ケツバット」の洗礼です。ノックを受けてエラーが多いとすぐにケツバット。ひとつひとつのプレーに「あーだ、こーだ」と文句を言われて、反抗的な態度が少しでも見えれば、連帯責任といわれて、練習終了後、小学生全員で30分くらい正座をさせられました。最も苦しかったのが、水を飲ませてもらえなかったことでした。

「おい、尻の皮が厚くなったぞ」

「やめよーよ」「うん」

私たちは2週間でそのクラブを逃げ出してしまった。

楽しかった野球というスポーツがその時以来、私の中からふつりと消えてなくなってしまうのです。

先輩のしごきや指導者の強制というものが、何の免疫も持たない小学生を恐怖で押しつぶしてしまったのです。

これもまた不思議な話で、当時はまだ軍隊式の教育のなごりがあり、しごきも当然と思っていたのですが、技術指導にかこつけて、自分の思いのままに人を動かそうとする指導者の言動に、実際に遭遇してみると自尊心を粉々に打ち砕かれた屈辱感には絶えがたいものがありました。

野球の名誉のために言っておくと、野球が悪いのではなく、野球を指導した人が無知であっただけなのです。

現在は体罰的なものは影を潜めているようですが、まだまだ大人の無自覚な言動（罵声や脅し文句や懲罰的なトレーニングなど）は散見されます。

スポーツは青少年の心身の発育発達に有為性があるから、スポーツは心身教育になり得る。であるからスポーツを青少年に教えることが教育だ。という筋違いの観念ができあがり、技術指導と躰（しつけ）の指導法がまかり通っているわけです。学校教育のスポーツは教材（体育）として採用し、身体運動の実際とスポーツ文化を学習するのですが、スポーツそのものは人間を教育する道具ではなく、生きてゆくための栄養食と考えるはいかがでしょうか。

## 太陽の子供たち

わたし自身は少年の頃のサッカー経験はない。少年のイマジネーションを持たないし、自然に覚えたテクニクも持ち合わせていない。ボールを蹴っている少年たちを羨ましいとさえ思う。しかし、私も少年の頃、違うスポーツで楽しさを味わった。この時期の自由で奔放なところは今も同じだ。私がサッカーを最も愛した理由は経験したことのない少年サッカーを想像して、今も出来ることかもしれない。

—ジャーナリストの声—

「俺のライバルは、小学生時代の中田英寿」という言葉がある。ストライカーとして活躍していた少年時代の試合で、前線に走り込みながら背後からのパスを待っていた中田は、あそここの空白に走り込めばこんなパスが出てくるということが、背後を振り向くこともなく、いつも本能的にわかったのだという。背中で起こっていることが、手に取るように「見えて」しまった小学生時代の自分の感覚を、中田はサッカー選手として最高の状態にあったといまも考えている。彼には、サッカーを動かす見えざる神の腕さばきが、本能的に感じられたのである。

だがプロ選手をめざして練習を重ねれば重ねるほど、あの本能的なプレー感覚はどこかに遠のいていった。中学、高校と進むうちに、自分の感覚が鈍ってどんどん下手になっていると実感した中田は、サッカーの本能の後退を身体の内芯で微細に感じながらも、それをなんとか甦生させようとあらたなトレーニングを自らあみ出してゆく

かのヨハン・クライフは、オランダの将来を考えてユースセクション、若手育成に何が必要かという問いに対し、「ストリートサッカー」の復活を挙げたそうである。

なんでも「子供の内に覚えた事は、忘れたくても体が忘れない。さらに誰から強制されたわけでもなく、遊びの中で自ら考えて習得したテクニクやアイデアは後々のプレイの幅を大きく広げ、選手としての大きな財産となる。」と云うのが理由らしい。

さらに最近の選手にフィジカル能力は高いが、「テクニク、イマジネーションが無い選手が多いのは、少年時代から型にはめた自由度の低い指導を行なっているからと断言している。

全身を使つてボールを追い、走り、ジャンプする

たったそれだけのことが私たち人間には必要なのです

ボールが仲間との絆を教えてくる

ボールだけが真実をかたる

立ちほだかる相手さえもほんとうは乗り越えるべき仲間なのです

ボールがすべてを教える

ボールは現実から私たちを解放し放ち

自由の中から生まれたところは光輝きます

それをさえぎる古くて厚い雲もつらぬいて

ボールは一生の宝となる

私たち大人は指導者という名称に幻惑されて、こころの片隅に持っている自由な時代を忘れているのです。本当は私たち大人がやらなければならない事を、指導者は子供にやらせているのです。自由な子供たちは私たち以上に、より先へ進んでいます。大人にはそれが見えないだけなのです。世界最高のプレーヤーが教えても、私たち素人が教えても、子供たちは自由の中でしか受け止めない。

私たち大人がやらなければならないことは、もっともっとサッカーを知り、もっともっとサッカーを楽しむ方法を考えることです。子供にはまだできないことを、私たち大人が実際に示すことです。

子供たちが自由な世界から見ているのは、大人の技術だけではなく生き方そのものを見ているのではないのでしょうか。サッカーという種目を超えて、私たち大人は真剣に考えるべきだと思います。私自身悲しいかな聖人君子に程遠い平凡な市民なので、社会人としての責任と義務というところをしっかりと果たそうとして、いまだ勉強している発展途上人間なわけです。